

本当の心（メール）

私の名前はハルナ。私の親友はミナミとマユ。私たち3人は家も近くだったので、小さい頃から一緒に遊んでいた。小学校の頃には何度かけんかもしたけれど、いつもすぐに仲直りしていた。ミナミは思ったことは何でも言わないと気が済まない性格なので、よく男子とも言い争いになることがある。自分の意見をはっきりと話せるミナミを、私はいつもうらやましく思っている。おしとやかで静かなマユはいつも聞き役。しゃべりまくっているミナミの横で、相づちをうっている。

「私たち、性格が全く違うのに、どうして仲がいいのかな？」

ミナミの言葉に私は答えた。

「話が合うからだと思うよ。」

マユがうなづいてくれた。

「そうだね、一緒に話をしていて楽しいから、仲がいいんだよね。」

私もミナミの言葉にうなづいていた。

今年のクラス替えで私は2人と別のクラスになってしまった。クラスや部活は別々でも終わるのを待って、3人で一緒に話をしながらいつも帰っていた。

今日は、ミナミが部活の片付け当番。私はマユと一緒に、ミナミが来るのを待っていた。

「いいな、2人は同じクラスで。」

「うん、あのね。」

そう、マユが言いかけたとき、

「お待たせ～！」

ミナミが勢いよく現れた。

そこからは、ミナミのマシニングトークが炸裂（さくれつ）した。今日、クラスであったことを事細かに話しまくる。ミナミの話を聞いていると、自分のクラスより、ミナミたちのクラスの事に詳しくなってしまうようだ。

「そういえば、ハルナのクラスでは、学級委員と委員会が決まったの？」

「私のクラス、中心になる人いないから、学級委員長も決まらなかったんだ。明日の放課後も続きの話し合いするんだって。」

「うちのクラスは、私が話を進めるから、全部決めちゃった。」

そうか、ミナミがクラスの議長ならすぐに決まるよね。

「ところで、ミナミは何委員？」

「私は学級委員長。もちろん、立候補したんだ。マユは保健委員。危なく生活委員になるところだったんだから。」

「ふ～ん、マユはまじめだから、生活委員でもいいんじゃない？」

私はマユの方を見ながら聞いた。すかさず、ミナミが答えた。

「生活委員は朝に服装点検をするんだよ。マユが男子に『Yシャツのすそ入れて』なんて言えると思う？だから、保健委員に推薦したんだよ。」

ミナミたちのクラスの話聞きながら、私は何に立候補するかを考えていた。

携帯電話を買ってからは、3人でメールのやりとりをしている。帰りの時間に話しきれなかった事でいつも盛り上がっている。

あっ、マユからのメールだ。



『私ね、生活委員やってみようかなと思っていたんだ。』



『マユ、どうして?』



『私ね、引っ込みじあんだから、ミナミちゃんを見習おうと思って。』



『じゃあ、マユ、生活委員をしたら?』



『でも、もう決まってしまったから、保健委員がんばるよ!(^_^)』

マユとのメールのやりとりの10分後にミナミからメールが来た。



『ハルナ、実は今日の話合い大変だったんだよ。』



『あれ?すんなり決まったんだんじゃないの?』



『ちがうよハルナ。はっきりマユが言わないから、もう困っちゃったんだ。』



『マユは生活委員をやりたいって言ってたよ。』



『そうじゃないんだって。私、ちゃんと聞いたよ。』



『あれ??そうなの?』

私はどっちの話が正しいのか分からなくなってきた。

ミナミとのメールのやりとりの後、どっと疲れを感じた。3人で話しているときにはあんなに楽しいのに、どうしてメールだと疲れてしまうのかな?

私は携帯電話を机に置いて、母のいる居間に向かった。

私は母に、今日の帰りの3人の話のこと、マユとミナミのメールの内容を話した。

「おかあさん、私、誰の話信じればいいの?」

「3人でもう一度話してみなさい。直接話すのとメールのどっちをハルナは信じるの?メールだけでは伝わらないことがたくさんあるんじゃない?」

私は部屋に戻ってに帰って、母の言葉を思い出しながらしばらく考えた。

「2人の誤解を解くためにはどうしたらいいだろう」

私はミナミとマユ宛に同じメールを書いた。



『ミナミ、マユ、明日の朝、3人で話そう。』

直接話せばわかってもらえる。そう信じて送信のボタンを押した。